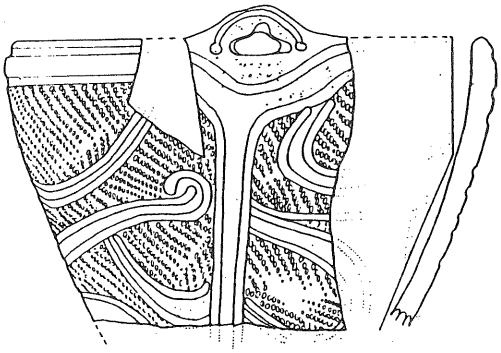
第３号　１９８９．１０

潮流

種子島考古学研究会
鹿児島県西之表市西之表7465　鮫島方
〒891-31　☎0997-23-0606



一之鳥居貝塚採集の縄文土器

『潮流』第３号　目次

種子島最北端出土の押型文土器 ――――― 鮫島安豊　2
久保田遺跡発見の縄文早期土器について -- 新東晃一　3
大花里一之鳥居採集の土器 ――――――― 関　一之　5
西之表市城ノ浜発見の貝輪 ――――――― 関　一之　7
中種子町大園遺跡採集の安行式土器について 東　和幸　8
編集後記 ――――――――――――――― 鮫島安豊　11

種子島最北端出土の押型文土器

―国上久保田遺跡の押型文土器発見のメモリーから―

鮫　島　安　豊

この遺跡は、種子島の最北端の西之表市国上久保田に所在する。

今から、６年前（昭和57年）、県道湊～久保田の道路拡張工事の直後、道路壁面に包含層が発見された。丁度、小生は、種子島の火山灰層の調査のため、道路の壁面スケッチで走り回っていた頃であった。

「久保田のガードレール」と釣り師たちが呼ぶこの場所にさしかかった時、雨上がりの直後ということもあって、見上げるばかりの土手は、整然と重なる３本の火山灰層を、鮮やかに露出させていた。しかし、もっと驚いたことは、最上部の火山灰層の直下に明らかな包含層を確認できたことであった。火山灰層に関心を持ち走り回っていた矢先のことであったからその発見の喜びは、例えようのない程であった。早速、急壁をなす土手を一気によじ登って、遺物の確認を行なった。

遺跡に立つと、水平線の彼方に大隅半島の串良方面を臨むことができる。いわゆるこの遺跡は、種子島最北端の急壁上に位置している。そして、海抜50m程度で、久保田の海岸を直下に見下ろすことができる。

西之表パミスの上に３本の火山灰が確認され、遺物包含層は、最上部のアカホヤ層の直下の黒褐色砂層であった。私はその下の粘質層（種子島で早期の塞ノ神式土器等が発見される層）にくい込む状態を想定していたが、それより、幾分新しい時期であるように思われた。更に、包含層の遺物を確認するにつれて、使用痕跡を全く発見できない小石が多く、石質も、下の海岸で容易に手にいる軟砂岩が多いこともわかった。更に熱を受けて変色しているものが多いことも特徴的であった。

その中に、驚くべき押型文土器の数片が発見された。極めて、焼成の悪い黒褐色の土器（撚糸状のもの）さらに前者に比較して幾分堅牢な土器（楕円形状・穀粒状）そして極めて堅牢な山形押型文であった。特筆すべきは、押型文土器の発見は、これが種子島で最初の発見であったことである。急壁をなすこの台地に、如何なる生活が営まれたのか？種々想像を逞しくすることであった。

押型文土器については、私自身報告書や図鑑で見る程度で、実際に手にしたことがなかったから、驚きはひとしおであった。早速、学兄新東晃一氏に電話で教示を仰ぎ、更に文献提供によって、県下各地の出土状況を知ることができた。

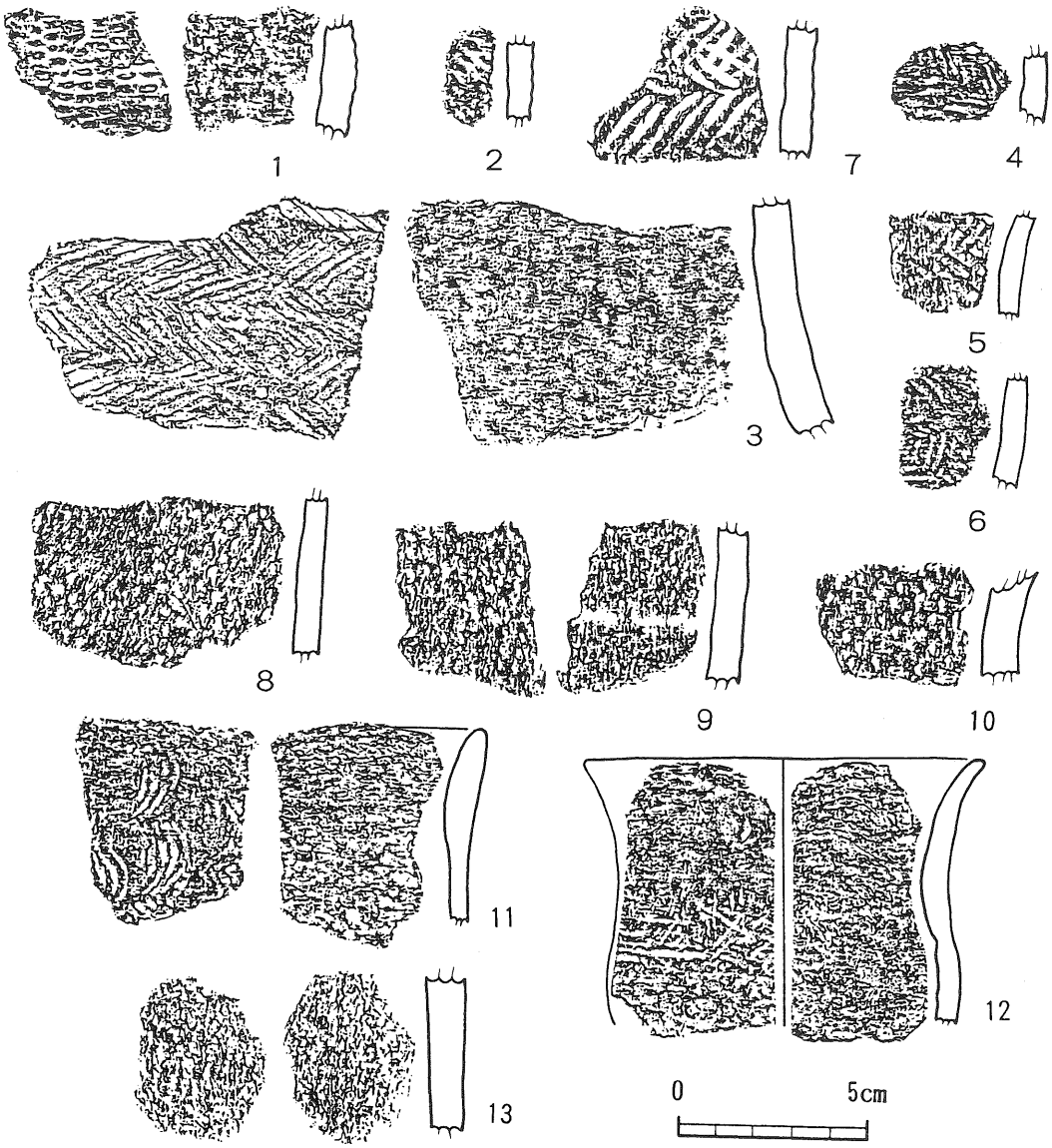
遺跡に良し悪しはつけられないが、誠に貴重な遺跡であった。しかし、いずれの遺跡も共通して持つ悩み（発見と破壊）は、この遺跡にもあった。残念なことに、この遺跡の裏は畑に削りとられており、幅２m程度の土手を残すのみになっており、遺跡の拡がりの把握は、困難になっている。また、削り取られた畑の一隅のアカホヤ層から、かなり下がったところに、直径30cm程度の焼石群が当時、露出しており関心を持っていたが、今日、すでに実見できなくなっている。

今後、この周辺を注意深く監視していこうと思っている。以上、当時のメモをひもどき、思いつくままに記憶をたどってみた。考古学資料としての記録にはならないが、私自身のメモリーとして・・・・。

久保田遺跡発見の早期土器について

新　東　晃　一

西之表市国上久保田から押型文系土器の発見の報（鮫島安豊氏から）を聞き、驚きとともに早く実見したい焦燥に駆られていた。その後、公務や私用の多忙で渡島の機会も無くいたずらに年月が過ぎ去っていた。そして、『潮流』３号の発行の話が持ち上がった時一番に取り上げて欲しかったのが、この久保田遺跡出土の押型文系土器であった。つまり、離島の種子島での押型文系土器の発見は、南九州縄文研究にとってはそれほど重要な意義



久保田遺跡出土の縄文土器

をもつものであった。発見の経緯については鮫島氏の報文に詳しく紹介されているので、ここでは発見土器の若干の説明とその意義について述べてみたい。

発見者の鮫島氏によると発見された土器は、すべてアカホヤ火山灰層下の同一層内のもので、縄文時代早期に該当することが想定される。

総数17片が採集されているが、そのうち13片の図化が可能であった。その内訳は、形態により次の５種に類別することが可能である。

Ⅰ　楕円押型文土器（１・２）　細かい穀粒状の楕円押型文で、同一個体と考えられる。

Ⅱ　山形押型文土器（３～７）　いずれも胴部片であるが、浅い刻目の間延びした大型の山形押型文土器である。３～６はほぼ同施文で、同一個体の可能性が強い。７は刻目が深く、櫛描文の可能性もある。

Ⅲ　刺突文土器（８～10）　８～10は、櫛歯状の施文具による刺突文土器である。３点とも施文具や胎土や焼成が異なり別個体と考えられるが、施文の手法は類似する。櫛歯状の施文具としては貝殻腹縁が考えられるが、明確に断定し得る資料ではない。

Ⅳ　変形撚糸文土器（11・12）　口縁部から胴部片が、２片出土している。11は、口径10.6cmの比較的小型の深鉢形を呈し、頸部が締まり口縁部は外反する。肩部から頸部にかけて変形の撚糸文が施文されている。12は、口縁部片で内面が若干膨らみをもつ。口縁外面に変形の撚糸文を施文する。

Ⅴ　貝殻腹縁刺突文土器（13）　貝殻腹縁の刺突文を羽状に施文するタイプである。

以上、Ⅰ～Ⅴ類に類別して紹介したが、Ⅰは楕円文で押型文土器である。Ⅱは山形押型文土器であるが、形態から手向山式土器に該当する。Ⅲは特異な刺突の施文であるが、中尾田遺跡（姶良郡溝辺町）第９Ⅰ類に酷似し、手向山式土器の範ちゅうに属することが考えられる。これらは、いずれも押型文系土器の終末期に該当するものである。Ⅳの変形撚糸文土器もほぼこの時期にみられるもので、押型文と同じ手法の回転施文である。このことからⅠ～Ⅳは、南九州においては外来系の土器とみることができる。Ⅴは、西之表市下剥峯遺跡出土の下剥峯Ⅱｂ類土器に酷似するものである。下剥峯Ⅱｂ（あるいはｃ類）類土器は南九州の円筒系土器からの派生が考えられるもので、この１点は在地系土器とすることができる。その他にも、条痕文系の在地系とみられる細片も含まれている。

種子島における押型文土器は、県教委発行の『鹿児島県市町村別遺跡地名表』には早くから中種子町油久奈佐田遺跡（番号80-10 ）に明記されているが、どのような形で作成されたか定かでなく、また資料も実見され得ない。また、種子島全般を扱った『中種子町郷土誌』にも、押型文土器についての記載は一切登場していない。

従来、種子島における縄文早期の遺物では、塞ノ神式土器出土の遺跡が最も多く発見され、特に中種子町輪之尾遺跡は著名であった。その後、吉田式土器や下剥峰式土器等の出土が知られるようになり、早期の遺跡は南九州本土とほぼ同様な密度や様相を呈しているようである。しかし、吉田式や下剥峰式や塞ノ神式等は南九州在地系の円筒土器系統に属す土器型式であり、押型文土器など外来系の土器型式はこれまで確認されていなかった。

今回の久保田遺跡における押型文土器の出土は、押型文土器が種子島に渡島したことを実証したことになるとともに、縄文時代早期においては種子・屋久までは南九州の本土文化とほぼ同様の様相であったことを窺いしることができる。この事実は、画期的な発見として評価されるものであろう。

大花里一之鳥居貝塚採集の土器

関　一之

ここに紹介する土器は、西之表市西之表 857番地（大字大花里）字一之鳥居に所在する貝塚より筆者が昭和55年から昭和60年にかけて採集した資料の一つである。縄文と沈線を組み合わせた、いわゆる磨消縄文で器面全体を文様構成する精製土器である。このタイプは、一見して在地系土器ではないと考えられるものである。近年種子島では、この類の資料の発見が増えており、採集品ではあるが注目すべき資料と考えここに紹介するものである。

大花里一之鳥居貝塚は、西之表市街地から約 2.4km北側に離れた比較的内陸部まで拡がる砂丘地上に存在する。遺跡は標高40mで、海岸線まで約 340mを測る砂丘地後背部に位置する。隣接する耕作地は、昭和52年に西之表市教育委員会によって発掘調査が行なわれた大花里遺跡で松山式・市来式・西平式土器等が出土している。

この土器は、鉢形の器形を呈する。胴部は膨らみを持たず、口縁部は内湾して口唇部は平坦に納め内傾する。口縁部を上面からみると正円ではなく、長径22cm、短径19cmの楕円形を呈している。また、長径の両端には突起部を作る。突起部は左右とその上方から竹管状の施文具で穿孔を施し、それによって把手状のモチーフを作り出している（内面の孔の大きさは 2.1cm× 0.9cmを測る）。

器厚は把手下部で 1.2cmと最も厚く、他は 0.7cmの厚さで均整に仕上げる。

文様は地文に縄文を施し、その上から二本平行の沈線文間を磨消して構成された文様を展開する。口縁部を横位に巡る二本平行沈線の下線は、４ケ所で縦位に走行し文様帯を区画する。４つの区画内は、磨消された二本平行沈線文が同一パターンの文様で展開する。文様は、区画する横位と縦位の沈線文から二本平行で直線や曲線で展開し、そのうち１カ所は端部を蕨手文で強調する。４区画とも同様の文様構成がみられるが、１区画の横位の直線文とその端部の蕨手文は１本の沈線文で描かれているのが特徴的である。

また、把手部は、穿孔部の両側に円形の刺突文を施し、その刺突文から穿孔の上部に沈線で弧線を描き刺突文を繋いで把手部を強調している。

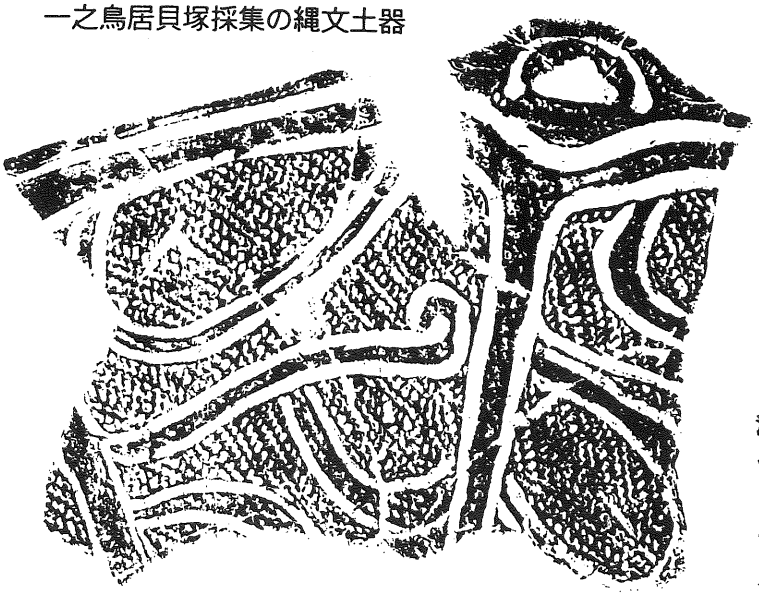
磨消縄文の順序は、　縄文　⇨　沈線　⇨　磨消　の順に行なわれ各所に“消し残し”が確認される。

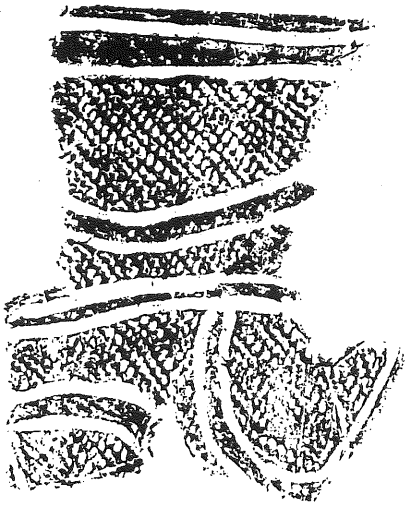
磨消縄文の施文からみると、広い部分に縄文が施文される傾向は中津式土器等に共通するが沈線文等の構図は異なっている。沈線文等の文様構成は、福田ＫⅡ式土器に類似するが縄文部分は逆に施文されている。縄文時代後期に該当する時期の所産であろうが、これまでのところこのタイプの類例は知らない。類例や該当型式の御教示をお願いするとともに、類例の増加を待ちたい。

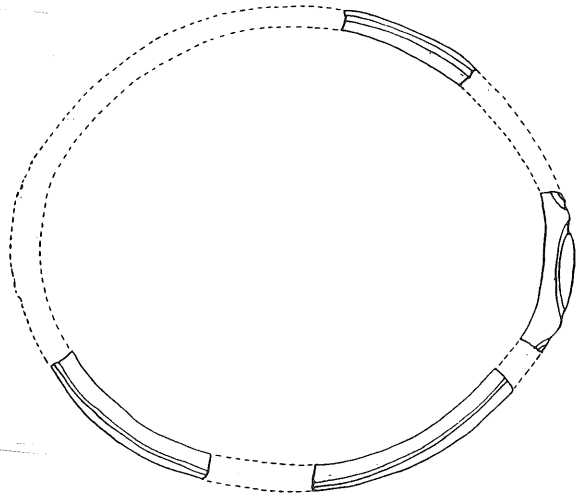
大花里一之鳥居貝塚は、紹介した土器の他に多数の土器と共に石器・貝製品・貝類・魚骨・獣骨等が採集されている。採集された土器の大部分は、指宿式土器である。

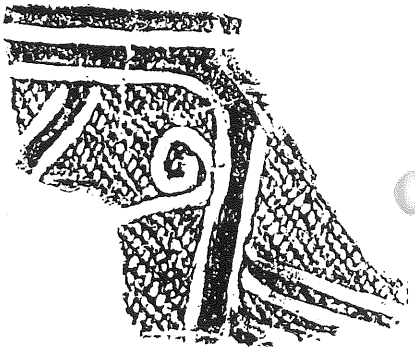
大花里一之鳥居貝塚は、昭和53年に行なわれた採砂工事によりその大部分が破壊され、現在ではその一部を残すのみである。

一之鳥居貝塚採集の縄文土器

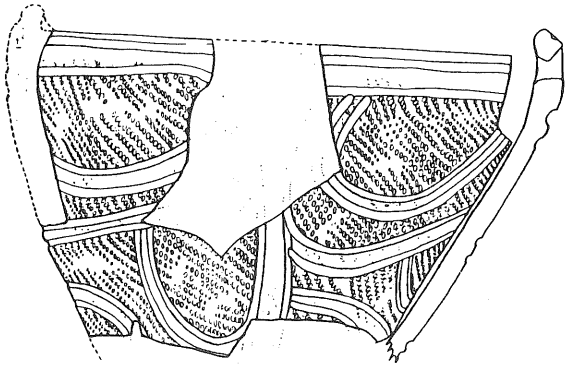


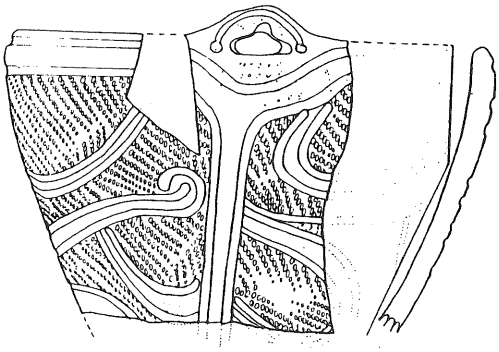






0 5cm





西之表市城ノ浜発見の貝輪

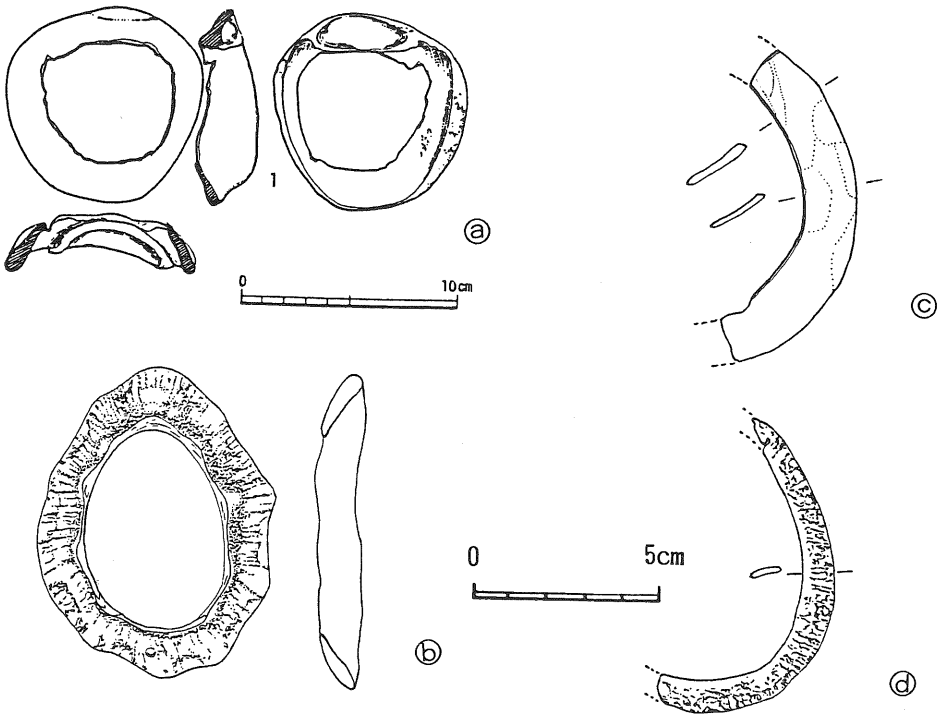
関　一之

ここに掲載する貝輪は、西之表市在住の山崎勇三氏が昭和54年から昭和56年にかけて同市安徳川と綿打川に挟まれた砂地より採集した資料である。通称“城ノ浜”と呼ばれるこの砂地において、山崎氏は沢山の考古資料を採集している。それらの資料は、縄文時代から近世に及ぶもので時代幅が長い。今回、氏の御好意により、発表の機会を与えられたものである。図ⓐのゴホウラ製貝輪はすでに紹介されており（註）、これを除く３点を追加資料として極簡単に紹介したい。

図ⓑはオオツタノハ製貝輪である。外周径は 8.2cm× 6.1cm、内周径は 5.2cmを測る。内外周縁部ともよく研磨され、全体的に滑らかに調整されている。図ⓒはゴホウラ製貝輪の破損品である。非常に薄く整形されているが、破損品の二次加工と考えられる。図ⓐと同様の広田型である。図ⓓはオオツタノハ製貝輪の破損品である。摩耗が激しく貝の表面の凹凸も極めて少ない。推定復元の内径は、 7.5cm× 6cmを測る。

採集地は旧河床や波打際に近い砂地等の広範囲に及ぶため、正確な出土原位置を示していないことが考えられる。また、どのような資料と共伴するのか特定できないが、小砂丘を背後に有する広田遺跡や鳥ノ峯遺跡と酷似した立地をなすことから、この海浜周辺に弥生時代中～後期相当等の埋葬遺跡などが存在する可能性も極めて高い。

（註）木下尚子 1980 「弥生時代における南海産貝輪の系譜」『日本民族文化とその周辺―考古編―』国分直一博士古稀記念論集



城ノ浜発見の貝輪

中種子町大園遺跡採集の安行式土器について

東　和幸

プロローグ

「おや？　ええ？　まさか！」．．．立神次郎氏と堂込秀人氏が中種子町立歴史民俗資料館から借りてきた土器のなかには、確かに地元の土器でないものが混ざっていて、みんな首をかしげていた。筆者自身も１度は見過ごしていたものの、数日後何気なく見ていた。．．．『ブタバナ』を手にしたとき、「やっぱい　じゃっど！」あわてて近くに居合わせた、学生時代を関東で過ごした人たちに尋ねてみた。「おう　じゃっど！」幸いに、宮田栄二氏が関東で採集した本物の安行式土器を保管していたので、早速比較してみた。縄文の施文方法といい、文様の構成、色調．胎土とも全てが似通っている。その夜は、様々なことが頭のなかを駆け巡り、興奮したままなかなか眠ることはできなかった。

安行式土器の発見

大園遺跡は、種子島のほぼ中央部分の西海岸に面する標高70mの台地に位置する。昭和54年３月に鹿児島県教育委員会によって発掘調査され、縄文時代前期から中世にかけての多数の遺構に伴なって多彩な遺物が出土した複合遺跡である。しかし、報告書は未だ刊行されておらず、詳しい内容は不明のままである。

採集者の岩坪博秀氏は発見当時中種子町立歴史民俗資料館に勤務しており、町内の遺跡を精力的に踏査されていた。約10年前で工事が終了した後というので、昭和55年頃のことと思われる。安行式土器は、発掘調査が行なわれた地点から山裾へ約 100m離れた切り通し断面の黒色土中に挟まっていたという。岩坪氏はしばらく自宅で保管した後、資料館に持ち込まれたとのことである。

昭和63年６月、土地改良事業に伴なう鷹取遺跡他の確認調査後、周辺遺跡資料として重富収蔵庫へ持ち込まれたのは前述のとおりである。早速、拓本をつくり県内の研究者に検討していただくと共に、安行式土器であるという確証を得るためにつくば大学博士課程雨宮瑞生氏を通して関東の研究者に直接資料を見ていただいた。筑波大学教授岩崎卓也氏、国立歴史民俗博物館助手設楽博巳氏によると、①安行Ⅰ式から安行Ⅲａ式まで含まれる。②千葉県から茨城県南部にかけての土器に類似する。③13の土器は中部地方に分布する中ノ沢式土器と呼ばれるもので、中ノ沢式の中に安行式が入ってくることはあっても、安行式土器の中に中ノ沢式が入ってくることはめったにない等の教示をいただいた。

７月、雨宮氏、鹿児島大学埋蔵文化財調査室松永幸男氏と筆者の３人で種子島を訪ね、岩坪氏に現地を案内していただいた。このときは、安行式土器を採集したという切り通し断面に草が繁っており、畑のサトウキビも背丈以上にのびていて数片の土器しか採集できなかった。この中には、安行式土器と思われる破片は含まれていなかった。平成元年５月、再び岩坪氏、知花一正氏、沖縄国際大学生園田淳美女史と共に現地を踏査した。磨石、有肩石斧を含めて多数の土器片を採集したがこの中にも安行式土器は見つからなかった。

安行式土器とは

安行式土器は、関東地方の後期後半から晩期中葉にかけての土器型式である。大正８年山内清男氏・藤枝隆太郎氏が埼玉県川口市大字安行領家猿貝貝塚を発掘し、山内清男「下

総上本郷貝塚」『人類学雑誌』43―10　昭和３年　に「安行式」の名称が掲載されたものである。安行式土器の内容は、甲野勇「埼玉県柏崎村真福寺貝塚調査報告」『史前学会小報』第２号　昭和３年　で明らかにされ、山内清男「真福寺貝塚の再吟味」『ドルメン』３―12　昭和９年　によって分類された。

現在は、前浦式を加えた六型式区分が通用しており、最近刊行された金子裕之他『真福寺貝塚資料　山内清男考古資料１』奈良国立文化財研究所資料第30冊 1989.3 奈良国立研究所　に詳しく報告されている。

いつ種子島に運ばれたか

関東地方でつくられた安行式土器が、大園遺跡から採集されたことは事実である。それではいったい安行式土器はいつ種子島に運ばれたのだろう。縄文時代なのだろうか、それとも、現代なのだろうか。両方から疑って考えてみたい。

まず、縄文時代に運ばれたことを肯定するものとして、報告者は、①市来式が、愛媛県平城貝塚から五島列島、沖縄本島の広範囲に分布すること、②大園遺跡の発掘調査において、大洞式土器に類似した文様構成をもつ土器が出土したこと、③黒耀石や貝輪の材料たるオオツタノハなどの物資の移動、④伊豆諸島における北白川下層式をはじめとする外来土器の出土状況をあげている。しかし、②以外は時期や伝播過程が安行式土器の内容とは異なるものであり、積極的な傍証資料とは言い難い。幸いに大園遺跡からは安行式土器と同じ時期に該当する地元の土器が出土していることは、希望をなくすものではない。

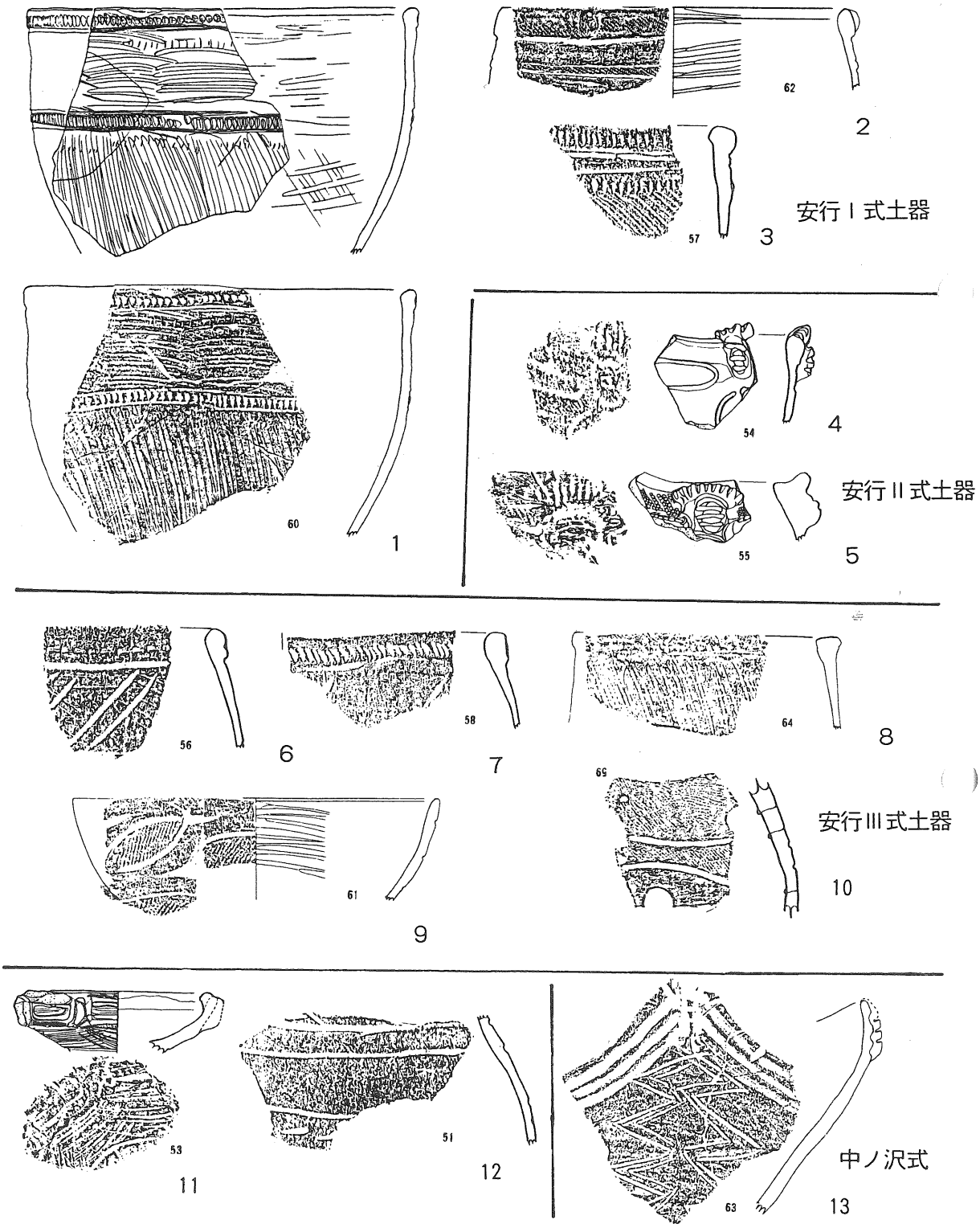
逆に現代人が運んだことを肯定するものとして、①安行式土器がⅠ式からⅢａ式にわたって採集されており継続的な交流がなければ、このような状態は考えられないこと。②９の土器片の内側に「しろたみつ」と読める落書きがあること。③採集品であり、しっかりした発掘調査によって得られたものではないことがあげられる。しかし、これらも安行式土器が縄文時代に運ばれたことを積極的に否定するものではない。

現在までの状況では、安行式土器が縄文時代に運ばれたことを肯定することも否定することもできない。50：50の状態である。将来的には、発掘調査を行ってはっきりされることだろうが、現在まずやらなければならないことは、姶良町重富収蔵庫に保管されている大園遺跡出土の土器を調べ直すことである。また、種子島々内から見つかっている外来系土器を検討することも重要な基礎作業であると考える。

エピローグ

関東地方を離れて早５年。遠く離れた地域が、再び急に身近に感じられた。私的には性急に結論を出すのではなく、夢の本を１頁１頁めくるように事実を突き止めてゆき、真実に迫った方が良いような気がする。それにしても、種子島という地域は、鉄砲伝来といい、スペースシャトル構想といい、ロマンをかき立ててくれる懐深い要素を多く秘めている。種子島がますます好きになりそうだ。　(1989.6.30)

文献：中種子町教育委員会1989.3　「鷹取遺跡・平松Ｂ遺跡・宮田遺跡・小牧野Ｃ遺跡」『中種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（１）』



スケールは、3．4．5．6．7．10．11．12＝ 0 10cm

1．2．8．9．13＝ 0 10cm

編集後記

ここに「潮流」第３号を難産の末、発行することとなった。

編集人の怠慢により、長く休止したこと深くお詫び申し上げたい。10年の間に、筆舌に尽くしがたい程の多くの変化や進歩があった。創刊当初から、何号続くかと期待（？）をされていたのだが、気持だけは、エターナルにと念じていた。

地方の末端では、専門的な研究学徒が少ないことや行政体制の未整備から来る市町村での発掘事例のないないことから考古学の研究活動や機関誌発行の継続は、極めて困難なことでもある・・・と当初から承知していた。

しかし、民俗や文献史であれ関心を持つ者で郷土の古代を考える総合的なものとして、この研究会を発足すれば、どうにか意義あるものになるのでは？「案ずるより産むが易し」という気持でスタートしたのだった。

しかし、いずれにせよ、第３号の発行は、種子島考古学研究の10年ぶりの再胎動であり、小さな小さなこの機関誌に対して絶大なご尽力をいただいた会員学兄（関氏、新東氏）に感謝する次第である。

会員の関氏は、創刊号時点から、一緒に努力した同志であり、このたびの再刊にも氏の努力によるところが多かった。今後は、この研究会の運営にも大いに力添えいただけるものと期待している。

種子島は、今まさに平成元年を迎え大きく変貌を遂げようとしている。

本年７月21日、高速艇ジェットフォィル「トッピー号」の就航によって、鹿児島～西之表（種子島）はこれまでの４時間から90分に大きく短縮された。九州本土最南端佐多岬までわずか25分である。船酔いをする暇もないほどである。

更に、平成７～８年を目途に、西之表市と中種子町の境界地の二十番にジェット空港建設の調査がはじまった。これに併せて、大型のホテル・ゴルフ場の建設などリゾート開発が種子島全体に入りこもうとしている。圃場整備事業に加えて、これらのゴルフ場建設等と埋蔵文化財保護の問題が、今後新たに発生することになろう。

ところで、若者の流失の激しい市町村にとって人口流出に歯止めをかけるべき企業の誘致や開発は是が非でも必要である。しかし、開発の名を借りて、埋蔵文化財や自然保護がなおざりにされるとすれば大きな問題である。

「より良きふるさと」を創生することとは、どういうことか？　新めて考える必要が生じる。抽象的に言えば、その土地に住んで良かったと思う―――そんな生活環境にすることであろうか？

そのためには種々考えられるが、忘れてならないのはやはり、インテリジェンスのある町ということではないか？　歴史や文化を大切にする落ちついた教育環境・老いも若きもその土地に住んで良かったと思うそんな環境ということではないか？

地方では、インテリジェンツィァーが泣いているという表現を見たことがある。

「潮流」の再胎動は、今まさに、そんな社会の動めきの中に出産しようとしている。

平成元年10月　編集人－鮫島記

潮　流
第３号　１９８９．10

種子島考古学研究会
鹿児島県西之表市西之表7465　鮫島方
〒891-31　☎0997-23-0606